令和５年２月２１日

南陽市議会
-5.2.21
分 1 1 3 類
保存5年

南陽市議会議長　船　山　利　美　殿

会派　倫政会
会長代行　山口裕昭

令和４年度 会派先進地等調査の報告について

このことについて、次により先進地等調査を実施いたしましたので、南陽市政務活動費に関する内規第４条の規定により報告いたします。

項　　目	調　査　・　研　修　内　容
調査期日	令和５年１月１５日(日)から１８日(水)まで　３泊４日
調査場所	①　島根県雲南市議会　②　島根県大田市議会
調査目的	①　地域自主組織による小規模多機能自治の取組について ②「住みたい田舎日本一！」に輝いた大田市の現在の移住・定住推進の取り組みについて
調査概要	① 別紙のとおり ②
その他	

会派視察報告書

令和5年　2月21日　提出

会派	倫政会	報告者	山口裕昭
視察場所	島根県　雲南市	視察日	令和5年1月16日

島根県　雲南市

概要：　雲南市は、豊かな森林や河川、滝など、中山間地域ならではの豊かな自然環境に囲まれており、桜や蛍が息づく自然と市民の生活が融合したまちづくりや、地域資源を活かした温泉施設、観光施設が整備され、水と緑が醸し出すうるおいのある穏やかな印象をもった美しい地域となっている。

また雲南市はヤマタノオロチ退治を中心とした出雲神話の舞台であるとともに、国宝に指定された銅鐸やたたら製鉄など地域特有の歴史や文化をもつ地域であり、農村景観や神楽、囃子など、暮らしに根ざした農村文化が豊富であり、日本のふるさとの原点ともいうべき歴史・文化が息づいている。

しかし、雲南市においても人口減少は深刻な問題であり、特に社会減の状況については大きな課題となっている。

そんな中、雲南市では地域自主組織による小規模多機能自治に取り組み、住民が自ら考え自らの地域は自らで治めるを基本に様々な取り組みを行っている。

今後本市でも、人口の減少に伴い地域の自治会活動が難しくなってくる局面が多くなってくるなかその対策として自治の方法を勉強するため、具体的取り組み／問題点／実績について質問を行った。

＜　地域自主組織の考え方＞

小規模多機能自治とは、小規模ながらも様々な機能を持った住民自治の仕組みであり、その規模は概ね小学校の学区が一つの単位となっているため、通常の自治会活動と比べてスケールメリットを発揮しやすい規模となっている。

一つの組織ごとに市の交付金が1,000万円及び指定管理料が百数十万円と大きな金額となっており、これに各自主組織が独自に直売所を運営するなどして独自財源を有しているため、各組織が独自に常勤スタッフを雇用して運営にあたっていた。

1）　地域自主組織のポイント

①　自らの地域は自らで治める
②　地縁で繋がる様々な人組織が連携しい相乗効果を発揮（地域の総合力）
③　イベント型から課題解決型へ・・・イベントにも何らかの目的があるはず
④　地域力（個性）を活かすこと

2）　取り組み事例

①　地域に伝承される神楽を子どもたちに継承
②　豊かな食文化の継承のため、10～80代の市民が参加する郷土料理教室を開催
③　店舗が消失した地域での買い物支援（廃校内に冷蔵庫や商品棚を設置し開設）

所感：　雲南市は神話の時代から継承される文化を守る歴史ある地域である一方平成16年のいわゆる平成の大合併で生まれた新しい自治体という一面があり、市のほとんどが中山間地域の自然豊かな市だった。

市の形態としては、複数の町村が合併した経緯から市街地が分散しておりあまり大きな都市形成はなされておらず、最近増えているコンパクトシティーの考えとは逆の発想の街づくりをしているという印象で、特に山間部の豪雪地帯では人口の減少が顕著だった。

これに関しては、本市の山間部集落と同様の内容であり著しい高齢化と過疎化は地方の山間地域共通の問題だと感じた。

地域自主組織の取り組み内容については、既存の公民館活動とあまり変わらない事業やそれをブラッシュアップした内容のものが殆どだったようだが、中には地域の特色を活かした光る事業もあった。

特に、閉店したJAを借り上げて直売所を経営するなどして収益を上げることで独自財源を確保し地域に還元する取り組みは、予算の確保が難しい小規模の自治体で有効な方法であると考える。

会派視察報告書

令和5年　2月21日　提出

会派	倫政会	報告者	山口裕昭
視察場所	島根県　大田市	視察日	令和5年1月17日

島根県　大田市

概要：大田市（おおだし）は、島根県の中部にある市で、日本海に面し、および中国山脈に接しており石見地域の東部に位置している。県中部の中心都市でもある出雲市に隣接し、浜田市益田市とともに「石見三田」（いわみさんだ）と呼ばれている。
地理的・歴史的に出雲地域と石見地域の中継点としての性質を有しており、石見地域の中では出雲地域との繋がりが強い。
市域西部の大森は、戦国時代から江戸時代にかけて日本最大の銀山とされた石見銀山の地でもある。
石見銀山は江戸期にほぼ掘り尽し1920年代には完全に閉山したが、2007年には「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録された。

＜「住みたい田舎日本一！」に輝いた大田市の移住定住の現在の取り組み＞

1）定住施策内容

① 定住推進員の配置→定住希望者の相談事業などを行う
② 定住相談会への参加→東京、大阪、広島で開催される定住フェアへ参加
③ 定住ガイドブックの作成→フェアや市役所カウンターでの相談時に使用
④ 定住サイト「どがどが」の運営
⑤ ふるさと情報誌「どがなかな大田市です！」の年2回発行
⑥ 空き家バンクの活用
⑦ おおだに住もう移住者定住支援事業→移住定住者の必要経費を助成

所感：大田市が「住みたい田舎日本一」に選ばれてから数年が経っており、その後の人口推移に興味があったが、人口減少の流れには大きな効果は見られず急激な高齢化が進んでいた。
高等教育機関がないことの影響で20代人口で大きな転出超過が見られることは、本市でも共通する問題であり、その抑制施策として「25歳同窓会開催事業」を行っており
その際に行う市外在住者の情報収集を各種定住施策の推進に活用されていた。
また、大田市では移住定住を専門業務とする部門が独立しておかれており、移住定住の相談窓口が一元化されていた。
移住定住の専門業務だけで部門運営に必要な業務量があるかどうかには疑問が残るが相談窓口の一元化は相談者にとって大きなメリットとなり得る。
南陽市でも、既存の部門内に専門の担当官を置くなどして、窓口の一元化は図るべきと感じた。